

## 献 辞

人文学部の専任教授であった立川昭二郎先生とリチャード・ホスキン(Richard F. Hosking)先生のお二人は、本年3月末をもってご退職された。人文学会においては、本『広島修大論集——人文編——』第39巻1号をお二人のご退職記念号として刊行する運びとなった。僭越ながら、お二人の本学におけるご業績等をご紹介し、献辞とさせていただきたいと思う。

立川先生は、1956年本学の母体である修道短期大学に専任講師として就任され、以来1998年3月末に至るまでの40有余年、本学の発展にご尽力されてきた。この間は、1960年における広島商科大学の設立、1973年における人文学部の創設とこれにともなう校名の変更など、本学が急速に発展をみせ始めた時期である。先生は、本学が広島商科大学として運営されていた時代に早くも学生部長や図書館長などの役職に就かれている。以後、1973年から1980年までの8年間は人文学部長として、また1984年から1990年の初めまでの6年間は本学学長として、本学の運営において大役を果たされてきた。この時期において、本学はいくつかの厳しい問題に直面しており、立川先生のご労苦たるや筆舌には尽くしがたいものであったと思う。

他面、長期にわたる激務のなかにあって、先生はご専門の文学研究においても数多くのご業績を積み重ねられている。近代日本の代表的な作家、例えば二葉亭四迷、夏目漱石、森鷗外や菊地寛などの諸作品のテーマに横たわる作者の人間観、世界観や作家自身の人間性に迫る研究論文は多数である。これらの内容を詳細にご紹介する紙幅はないが、本年1月に行われた先生の最終講義「森鷗外の遺書」は、人間森鷗外の内面世界、その苦悩をテーマとするものであったが、文学研究者としての立川先生の視座を強く浮き彫りしていたように思う。

最後に、先生が学生スポーツ、水泳の分野においても、その発展に努力されたことについて簡単に紹介しておきたい。側聞するところによれば、先生ご自身が若い頃より水泳を得意とされ、旧制中学時代には選手として活

躍され、また古式泳法、神伝流の達人ともお聞きしているが、財団法人日本水泳連盟の学生委員会中国・四国支部長として、同じく財団法人広島県水泳連盟の参与として長い間学生水泳界の発展に貢献されている。

今なお「文学青年」然たるの風貌衰えることのない立川先生の今後ますますのご健勝とご活躍を祈念してやまない。

ホスキンは、人文学部が発足した1973年の後期より、英語英文学科の専任教授として赴任された。当時、本学の商学部には中国語やスペイン語担当の外国人教員が在職していたとはいえ、同年4月に開設されたばかりの学部での教育に際しては相当にご苦勞されたであろうと思う。以来、先生は1998年3月に退職されるまでの25年間、人文学部において教育研究に専念されてきた。

学部教育においては、当初から「英作文」・「英会話」・「英語表現法」や「英米文学概論」等を担当された。その後、1978年に人文科学研究科英文学専攻修士課程が設置され、次いで1981年には同研究科同専攻博士課程が設置されたが、大学院においては主として比較対照言語研究を担当された。その後、ホスキンの研究領域は言語・文学領域にとどまらず、日本の食文化に関する社会学的研究においても成果を蓄積されて、1993年には同研究科社会学専攻修士課程の研究指導にも当たられることになった。

食文化に関する研究においてもその活動は実に意欲的であり、積極的であった。全国のさまざまな地域に資料収集や聞き取り調査に出向かっていた。こうした研究の成果はいくつかの論文にも纏められているが、1996年に出版された『A Dictionary of Japanese Food』(Tuttle)は労作の一つである。同事典はわが国の食材、古来からの料理道具や方法等を含めて、広く日本の食文化に関する事柄を入念に掘り起こし説明が試みられている。この事典は日本以外のいくつかの国においても翻訳出版されたとお聞きしている。

最後に、先生の学生指導にみられる姿勢の一端を披瀝しておきたい。先

生は、本学に赴任後、翌年の1974年から20年余にわたって学生サークル ESS の顧問としてひたむきに指導されてきたが、そのご努力には頭が下がる思いである。

ご退職後はロンドン市内に居を構え、静かな研究生活をお送りになるそうである。いつも物静かでにこやかなホスキン教授の一層のご健勝とご活躍を祈りたい。

人文学部長 森 川 泉